

は じ め に

6月に群馬県の富岡製糸場が新たに世界文化遺産に登録され、地元は歓喜の声にあふれています。これで日本の世界遺産は18箇所となり、その中には、自然遺産の白神山地や屋久島等のように構成要素として森林が重要な役割を果たすものや、文化遺産にも神社・仏閣等の木造建築物だけでなく、奈良の春日山原生林のように森林が登録されているところもあり、日本人は森林を利用し、育て、守り、信仰の対象や芸術の源泉としながら、様々な形で森林に接することで多様な森林文化を育んできました。

独立行政法人森林総合研究所は、平成23年3月に第3期中期計画を策定し、森林に関する多方面からの研究を行い、その成果の社会への還元に努めています。そして林木育種センターでは、木材生産や環境保全等に対してより効果を発揮する樹木の品種の開発や、貴重な林木遺伝資源の保全等を行うこととしています。

中期計画の中間年となる平成25年度は、林木の新品種の開発目標数が概ね50品種に対して56品種を開発しました。その内訳は、林業の再生のために、初期成長に優れたスギを14品種、材質の優れたスギを1品種開発し、国土・環境の保全のために、花粉の少ないスギを2品種、二酸化炭素の吸収に優れた幹重量の大きいヒノキやカラマツを20品種、マツノザイセンチュウ抵抗性マツを19品種開発しました。さらに初期成長が特に優れ、造林コストの抑制が期待されるエリートツリーをスギ、ヒノキで172系統選抜しました。

研究開発においても、林木育種の高速化に向けた技術開発については、分子育種技術の開発のため、スギの器官別発現遺伝子の情報を統合しました。遺伝資源の収集等に関する技術開発では、少数の系統で全体の変異を代表するスギ遺伝資源のコアコレクションを作成しました。バイオテクノロジー関係では、絶滅危惧種ワダツミノキの薬用成分含量の解明と増殖方法を開発し、そして、海外との協力においても熱帯・亜熱帯に広く分布するテリハボクについて、耐風性との関連性が考えられる枝数の家系間変異を見いだしました。

林木遺伝資源の探索・収集については、育種素材として利用価値の高いものや希少性の高いものを中心に収集目標数概ね1,200点に対して1,386点を収集し、保存、評価、配布を行いました。苗木についても、全国からの要請に応じ33都道府県に10,131本を配布するなどして新品種等の普及に努めました。

また平成25年5月に改正された「森林の間伐等の実施の促進に関する特別措置法」に関連して、樹木による二酸化炭素の吸収の強化を図るため特に優良な種苗を生産するための種穂の採取に適する樹木として農林水産大臣が指定する「特定母樹」に、スギエリートツリー、少花粉スギ等53系統が指定されました。今後、これらのさらなる普及を目指していきます。

平成26年3月には林木育種開発品種説明会を開催したところですが、林木育種に関係する方々をはじめ、森林組合、種苗生産業者の方々に多数お集まりいただき、貴重なご意見を賜り感謝いたします。今後も国民の目線に立った研究や普及の実施に邁進し、より豊かな森林と人との関わりに資するよう努めて参りますので、引き続きご支援とご協力をお願い申し上げます。

平成26年7月

独立行政法人森林総合研究所

林木育種センター所長 井上 達也